

1

$a, b, c$  を複素数とするとき、次のことは正しいか。正しいものは証明し、正しくないものについては反例（成り立たない例）をあげよ。

- (1)  $ab, bc, ca$  がすべて 0 ならば,  $a, b, c$  はすべて 0 である.
- (2)  $a+b, b+c, c+a$  がすべて実数ならば,  $a, b, c$  はすべて実数である.
- (3)  $a^2+b^2+c^2=0$  ならば  $a, b, c$  はすべて 0 である.
- (4)  $a+b+c=0, ab+bc+ca=0$  ならば,  $a^3=b^3=c^3$  である.

1970

1

放物線  $y = x^2$  上の異なる 3 点  $(x_1, y_1)$ ,  $(x_2, y_2)$ ,  $(x_3, y_3)$  における法線が 1 点で交わる時、 $x_1 + x_2 + x_3 = 0$  であることを証明せよ。(曲線上の 1 点で、接線に垂直な直線を、その点における曲線の法線という)

1971

$(x_1, y_1)$  における  $y = x^2$  の法線の方程式は、

$$y = -\frac{1}{2x_1}(x - x_1) - x_1^2 \quad \dots\dots ①$$

同様に、 $(x_2, y_2)$  における場合は、

$$y = -\frac{1}{2x_2}(x - x_2) + x_2^2 \quad \dots\dots ②$$

①, ② を連立して、

$$\begin{aligned} -\frac{1}{2x_1}x + x_1^2 + \frac{1}{2} &= -\frac{1}{2x_2}x + x_2^2 + \frac{1}{2} \\ -\frac{1}{2}\left(\frac{1}{x_1} - \frac{1}{x_2}\right)x &= x_2^2 - x_1^2 \\ x &= 2(x_1^2 - x_2^2) \cdot \left(\frac{x_1x_2}{x_2 - x_1}\right) \\ &= 2(x_1 - x_2)(x_1 + x_2) \cdot \frac{x_1x_2}{x_2 - x_1} \\ &= -2x_1x_2(x_1 + x_2) \end{aligned}$$

したがって、交点  $(x, y) = (-2x_1x_2(x_1 + x_2), x_1^2 + x_1x_2 + x_2^2 + \frac{1}{2})$  である。

$(x_3, y_3)$  における法線も同じ点で交わるから、

$$\begin{aligned} x_1^2 + x_1x_2 + x_2^2 + \frac{1}{2} &= -\frac{1}{2x_3}\{-2x_1x_2(x_1 + x_2)\} + x_2^2 + \frac{1}{2} \\ x_1^2 + x_1x_2 + x_2^2 &= \frac{x_1x_2(x_1 + x_2)}{x_3} + x_3^2 \\ 0 &= x_3^3 - x_3(x_1^2 + x_1x_2 + x_2^2) + x_1x_2(x_1 + x_2) \\ 0 &= (x_3 + x_2 + x_1)(x_3 - x_1)(x_3 - x_2) \end{aligned}$$

ここで、 $x_3 \neq x_1$ ,  $x_3 \neq x_2$  であるから、 $x_3 + x_2 + x_1 = 0$  である。

(証明終了)

2

a

(1)  $y = \frac{\log x}{x^3}$  ( $x > 0$ ) の増減を調べ、グラフの概形をかけ。

(2)  $\int_1^t \frac{\log x}{x^3} dx$  を求め、 $t \rightarrow +\infty$  のときの極限値を求めよ。

b

数字 0 を記した札が  $n$  枚、数字 1, 2, …, 9 を記した札がそれぞれ  $m$  枚ある。この中から任意に 1 枚を取り出し、その札の数字だけの賞金を受ける。ただし数字 0 の札を引いたときは、その札を戻したうえ、もう 1 回だけ引きなおして、賞金を受けるものとする。

(1) 賞金の期待値を求めよ。

(2) 期待値を 3 以下にするには、比  $\frac{n}{m}$  をどの程度に大きくすればよいか。

1971

a

(1)  $y = \frac{\log x}{x^3}$  より、 $x$  について微分して、 $y' = \frac{1 - 3\log x}{x^4}$ ,  $y'' = \frac{4(3\log x - 2)}{x^5}$  である。  
増減表は以下の通りになる。

b

(1)

$$\begin{aligned}
& \sum_{k=1}^9 k \frac{m}{9m+n} \\
&= \frac{1}{2} \times 9 \times 10 \frac{m}{9m+n} \\
&= \frac{45m}{9m+n}
\end{aligned}$$

期待値を  $E(X)$  とすると,

$$\begin{aligned}
E(X) &= \frac{45m}{9m+n} + \frac{n}{9m+n} \times \frac{45m}{9m+n} \\
&= \frac{45m(9m+2n)}{(9m+n)^2}
\end{aligned}$$

$$(\text{答}) \quad \underline{\underline{E(X) = \frac{45m(9m+2n)}{(9m+n)^2}}}$$

(2)  $m \neq 0$  であるから,  $E(X) = \frac{45\left(9+2\frac{n}{m}\right)}{\left(9+\frac{n}{m}\right)^2}$  と表すことができる.

$$\frac{n}{m} = t \text{ とし, } f(t) = \frac{45(9+2t)}{(9+t)^2} \text{ と定めると, } f(t) \leq 3 \text{ から,}$$

$$f(t) \leq 3$$

$$\frac{45(9+2t)}{(9+t)^2} \leq 3$$

$$15(9+2t) \leq (t+9)^2$$

$$t^2 + 18t + 81 - 135 - 30t \geq 0$$

$$t^2 - 12t - 54 \geq 0$$

$t > 0$  より, これを解いて,  $t \geq 6 + 3\sqrt{10}$  であるから, 比  $\frac{n}{m}$  は  $6 + 3\sqrt{10}$  以上にすればよい.

$$(\text{答}) \quad \underline{\underline{6 + 3\sqrt{10}}}$$

1

次のおのおのについて解答せよ.

(1) 4 辺形  $ABCD$  と 1 点  $P$  がある.

$$\overrightarrow{AP} + \overrightarrow{CP} = \overrightarrow{BP} + \overrightarrow{DP}$$

が成立するならば, この 4 辺形はどんな 4 辺形か.

(2)  $x_k \geq 0$  ( $k = 1, 2, \dots, n$ ) のとき, 次の不等式を証明せよ.

$$\frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{1 + x_1 + x_2 + \dots + x_n} \geq \frac{1}{n} \left( \frac{x_1}{1 + x_1} + \frac{x_2}{1 + x_2} + \dots + \frac{x_n}{1 + x_n} \right)$$

1972

解答

$$(1) \quad \overrightarrow{AP} + \overrightarrow{CP} = \overrightarrow{BP} + \overrightarrow{DP}$$

$$\overrightarrow{AP} + (\overrightarrow{AP} - \overrightarrow{AC}) - (\overrightarrow{AP} - \overrightarrow{AB}) - (\overrightarrow{AP} - \overrightarrow{AD}) = 0$$

$$-\overrightarrow{AC} + \overrightarrow{AB} + \overrightarrow{AD} = 0$$

ここで,  $\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{DC}$ ,  $\overrightarrow{AD} = \overrightarrow{BC}$  であるから, 四角形  $ABCD$  は平行四辺形となる.(2)  $f(t) = \frac{t}{1+t}$  とする.  $f'(t) = \frac{1}{(1+t)^2}$  となり, 増減表は以下のようになる.

$t$	0	...	...
$f'(t)$		+	
$f(t)$	0	↗	

$f(t)$  は  $t \leq 0$  において, 狭義単調増加である.  $x_1 + x_2 + \dots + x_n = t$  とすると,  $\frac{t}{1+t} \leq \frac{x_k}{1+x_k}$  ( $k = 1, 2, \dots, n$ ) であるから,

$$\frac{t}{1+t} \leq \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \frac{t}{1+t} \leq \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \frac{x_k}{1+x_k}$$

を満たす. よって, 題意は示された.  $\square$ 

2

$f(z)$  は, 複素数を係数とする  $z$  の 1 次式であって,  $f(f(f(z))) = z$  がつねに成り立つものとする. このような  $f(z)$  をすべて求めよ.

1972

解答

$$f(z) = (a + bi)z + c$$

$$f(f(z)) = (a + bi)\{(a + bi)z + c\} + c$$

$$= (a^2 - b^2 + 2abi)z + c(a + 1 + bi)$$

$$f(f(f(z))) = (a + bi)^2\{(a + bi)z + c\} + c\{(a + bi) + 1\}$$

$$= (a + bi)^3 z + c\{(a + bi)^3 + (a + bi) + 1\}$$

ここで,  $f(f(f(z))) = z$  から,  $\begin{cases} (a + bi)^3 = 1 \\ c\{(a + bi)^3 + (a + bi) + 1\} = 0 \end{cases}$  を満たす. よって,  $c = 0$  である.

また,  $(a^3 + 3a^2bi - 3ab^2 - b^3i) = 1$  より,  $\begin{cases} b(3a^2 - b^2) = 0 \\ a^3 - 3ab^2 = 1 \end{cases}$  であり,  $\begin{cases} b(3a^2 - b^2) = 0 \\ a(a^2 - 3b^2) = 1 \end{cases}$  である.

よってここで場合分けを行う.

(i)  $b = 0$  のとき,  $a^3 = 1$  であり,  $a$  は実数より  $a = 1$

(ii)  $3a^2 = b^2$  のとき,  $a(-8a^2) = 1$  であり,  $a, b$  は実数より,  $a = -\frac{1}{2}$ ,  $b = \pm \frac{\sqrt{3}}{2}$  である.

(答)  $f(z) = z, \left(-\frac{1}{2} \pm \frac{\sqrt{3}}{2}i\right)z$

**3**

次の数列  $a_1, a_2, \dots, a_n, \dots$  の収束, 発散を調べ, 解答欄の表に番号を記入せよ. またその理由を述べよ.

(1)  $a_n = \frac{1}{n} \sin n$

(2)  $a_n = n^2 \sin \frac{1}{n}$

(3)  $a_n = n \cos \frac{n\pi}{4}$

(4)  $a_n = \sqrt{2n} - n$

(5)  $a_n = \frac{1}{n^2} + \frac{1}{(n+1)^2} + \dots + \frac{1}{(2n)^2}$

(6)  $a_n = \frac{1}{n} + \frac{1}{n+1} + \dots + \frac{1}{2n}$

1972

**解答**

(1)  $-1 \leq \sin \theta \leq 1$  より,  $-\frac{1}{n} < \frac{\sin n}{n} < \frac{1}{n}$  であり,  $\lim_{n \rightarrow \infty} -\frac{1}{n} = 0$  と  $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} = 0$  から, はさみうちの原理より,  $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$  である. したがって, 0 に収束する.

(2)  $\lim_{n \rightarrow \infty} n^2 \sin \frac{1}{n} = \lim_{n \rightarrow \infty} n \left( n \sin \frac{1}{n} \right) = \lim_{n \rightarrow \infty} n = \infty$  より, 発散する.

(3)  $\lim_{n \rightarrow \infty} \cos \frac{n}{4} \pi$  は振動するから,  $\lim_{n \rightarrow \infty} n \cos \frac{n}{4} \pi$  も振動する.

(4)  $a_n = \frac{(\sqrt{2n} - n)(\sqrt{2n} + n)}{\sqrt{2n} + n} = \frac{n^2 - 2n}{n + \sqrt{2n}} = \frac{n - 2}{1 + \sqrt{\frac{2}{n}}} \xrightarrow{n \rightarrow \infty} \infty$  より, 発散する.

(5)  $\frac{1}{(n+k)^2} < \frac{1}{n^2}$  より,

$$0 < a_n = \frac{1}{n^2} + \frac{1}{(n+1)^2} + \dots + \frac{1}{2n^2} < \frac{n}{n^2} = \frac{1}{n}$$

ここで,  $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} = 0$  より, はさみうちの原理から,  $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$  である. したがって, 0 に収束する.

(6)

$$\begin{aligned} \lim_{n \rightarrow \infty} a_n &= \sum_{k=1}^n \frac{1}{n+k} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \frac{1}{1 + \frac{k}{n}} \\ &= \int_0^1 \frac{1}{1+x} dx \\ &= \left[ \log(1+x) \right]_0^1 = \log 2 \end{aligned}$$

したがって,  $\log 2$  に収束する.

**4**

平面上の点  $P(x_0, y_0)$  を通って, 放物線  $y = x^2$  に 2 本の接線が引けるための必要十分条件は  $x_0^2 > y_0$  であることを証明せよ. またこのとき, この 2 本の接線の接点を  $Q, R$  として, 3 角形  $PQR$  の面積を  $x_0, y_0$  で表せ.

1972

**解答**

$y = x^2$  の  $x = t$  における接線は

$$\begin{aligned} y &= 2t(x - t) + t^2 \\ &= 2tx - t^2 \end{aligned}$$

であり、これが  $(x_0, y_0)$  を通るとき、 $t^2 - 2tx_0 + y_0 = 0$  を満たし、これが異なる 2 解を持つ条件は、この二次方程式の判別式を  $D$  とすると、 $\frac{D}{4} = x_0^2 - y_0 > 0$  であるから、 $x_0^2 > y_0$  となる。

また、 $Q(x_0 + \sqrt{x_0^2 - y_0}, 2x_0^2 - y_0 + 2\sqrt{x_0^2 - y_0})$ ,  $R(x_0 - \sqrt{x_0^2 - y_0}, 2x_0^2 - y_0 - 2\sqrt{x_0^2 - y_0})$  となるから、三角形 PQR の面積は、 $P(0, 0)$ ,  $Q'(\sqrt{x_0^2 - y_0}, 2x_0^2 - 2y_0 + 2\sqrt{x_0^2 - y_0})$ ,  $R'(-\sqrt{x_0^2 - y_0}, 2x_0^2 - 2y_0 - 2\sqrt{x_0^2 - y_0})$  となる。

ここで、三角形の面積を  $S$  とすると、

$$\begin{aligned} S &= \frac{1}{2} | -\sqrt{x_0^2 - y_0} \times (2x_0^2 - 2y_0 + 2\sqrt{x_0^2 - y_0}) - \sqrt{x_0^2 - y_0} \times (2x_0^2 - 2y_0 - 2\sqrt{x_0^2 - y_0}) | \\ &= \frac{1}{2} | -2(2x_0^2 - 2y_0)\sqrt{x_0^2 - y_0} | \\ &= 2(x_0^2 - y_0)^{\frac{3}{2}} \end{aligned}$$

$$(\text{答}) \quad \underline{\underline{(\text{面積}) = 2(x_0^2 - y_0)^{\frac{3}{2}}}}$$

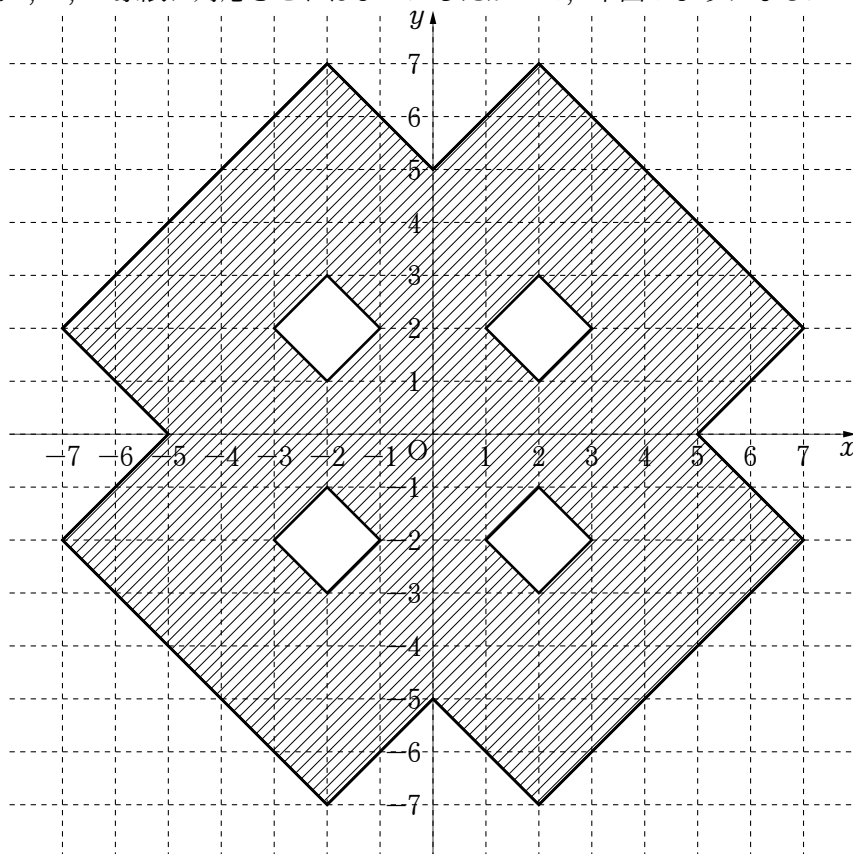
1

次の不等式を満たす点  $(x, y)$  が存在する範囲を図示せよ.

$$1 < ||x| - 2| + ||y| - 2| < 5$$

1974

$1 < ||x| - 2| + ||y| - 2| < 5$  について考える.  $|x|, |y|$  はともに偶関数のため, 第 1 象限について考え, それを線対称に第 2, 3, 4 象限に対応させればよい. したがって, 下図のようになる.



2

底辺  $a$ , 高さ  $h$  の 2 等辺三角形がある.(1) この 3 角形の内接円の半径  $r$  を  $a$  と  $h$  を用いて表せ.(2)  $n$  が 0 でない整数で,  $ah^n = 1$  を満たしながら  $a, h$  が変化するとき,  $\lim_{a \rightarrow \infty} \frac{r}{a}$  を求めよ.

1974

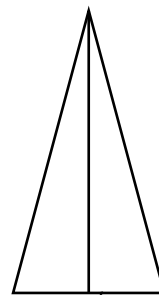
解答

(1) この三角形の面積を  $S$  とすると,

$$S = \frac{1}{2}ah$$

$$\frac{1}{2}ah = r \left( a + 2\sqrt{h^2 + \frac{a^2}{4}} \right)$$

$$r = \frac{ah}{2 \left( a + 2\sqrt{h^2 + \frac{a^2}{4}} \right)}$$



(答)  $r = \frac{ah}{2 \left( a + 2\sqrt{h^2 + \frac{a^2}{4}} \right)}$

(2)  $ah^n = 1$  より,  $h^n = \frac{1}{a}$ , したがって,  $h = \left( \frac{1}{a} \right)^{\frac{1}{n}}$

3

 $p \geq 0, q \geq 0, p \neq q$  である  $p, q$  に対して

$$|\log(p+1) - \log(q+1)| < |p - q|$$

が成立することを証明せよ.

次に,  $k$  を  $0 < k < 1$  である定数とすると  $|\log(p+1) - \log(q+1)| < k|p - q|$  が成立しないような  $p \geq 0, q \geq 0, p \neq q$  が存在することを示せ. ここで  $\log$  は自然対数を表すものとする.

1974

解答

条件式から  $p > q$  としても一般性を失わない. ここで,  $\frac{\log(p+1) - \log(q+1)}{p - q} < 1$  を示せばよい.

ここで, 平均値の定理から,  $f(x) = \log(x+1)$  とすると,

$$\frac{\log(p+1) - \log(q+1)}{p - q} = \frac{1}{c+1} \quad \dots\dots ①$$

となる  $c$  が,  $q < c < p$  の範囲に存在する.

$\frac{1}{p+1} < \frac{1}{c+1} < \frac{1}{q+1} \dots\dots ②$  であるから,  $\frac{1}{c+1} < \frac{1}{q+1} \leq 1$  を満たし,  $\frac{1}{c+1} < 1$  である.

したがって,  $|\log(p+1) - \log(q+1)| < |p - q|$  となる.  $\square$

また,  $0 < k < 1$  であることから,  $k = \frac{1}{1+r}$  ( $r > 0$ ) とおける. このとき,  $c = \frac{1}{1+r}$  となる  $c$  が存在することを示せば良い.

$p = r + \alpha, q = r - \alpha$  とすると,  $\frac{1}{r+1+\alpha} < \frac{1}{c+1} < \frac{1}{r+1-\alpha}$  となる.

ここで,  $\lim_{\alpha \rightarrow 0}$  を考えると, はさみうちの原理から,  $\frac{1}{c+1} = \frac{1}{r+1} = k$  となるため, 等号が成立するような  $p \geq 0, q \geq 0, p \neq q$  となる  $p, q$  が存在することが示された. したがって, 題意を満たす  $p, q$  が存在することが示された.  $\square$

4

$f(x), g(x)$  を  $x \geq 0$  で定義された正の値をとる連続関数で,  $g(x)$  は増加関数であるとする. このとき

$$S(x) = \int_0^x f(t) dt, \quad T(x) = \int_0^x f(t)g(t) dt$$

に対して次の (1), (2) を証明せよ.

(1) すべての  $x > 0$  に対して  $T(x) \leq g(x)S(x)$  である.

(2)  $\frac{T(x)}{S(x)}$  は  $x > 0$  で増加関数である. ここで一般に関数  $h(x)$  が増加関数であるとは,  $x_1 < x_2$  ならば  $h(x_1) \leq h(x_2)$  が成立することをいう.

1974

解答

(1)  $f(x) = g(x)S(x) - T(x)$  とする.

$$f(x) = g(x)S(x) - T(x)$$

$$f(x) = g(x) \int_0^x f(t) dt - \int_0^x g(t)f(t) dt$$

$$\begin{aligned} f'(x) &= g'(x) \int_0^x f(t) dt + g(x)f(x) - g(x)f(x) \\ &= g'(x) \int_0^x f(t) dt \end{aligned}$$

ここで,  $g(x)$  は増加関数より,  $g'(x) > 0$  であり,  $f(x)$  は正の値を取るから,  $\int_0^x f(t) dt > 0$  である.

したがって,  $f'(x) = g'(x) \int_0^x f(t) dt > 0$

よって,  $x > 0$  において,  $g(x)S(x) - T(x) \geq 0$  であるから,  $g(x)S(x) \geq T(x)$  が示された.



(2)

$$\begin{aligned}
\frac{T(x)}{S(x)} dx &= \frac{T'(x)S(x) - T(x)S'(x)}{S^2(x)} \\
&= \frac{f(x)g(x) \int_0^x f(t) dt - f(x) \int_0^x f(t)g(t) dt}{S^2(x)} \\
&= \frac{f(x)g(x) \int_0^x f(t) dt - \int_0^x f(t)g(t) dt}{S^2(x)} \\
&= \frac{f(x)\{g(x)S(x) - T(x)\}}{S^2(x)}
\end{aligned}$$

$f(x) > 0$  かつ (1) から,  $g(x)S(x) - T(x) \geq 0$  より,  $\frac{T(x)}{S(x)} dx \geq 0$  であるから,  $\frac{T(x)}{S(x)}$  は増加関数となる. □

1

次のおのをおのを証明せよ.

(1)  $\log_2 3$  と  $\log_3 4$  の大小を比較せよ.(2)  $\cos \frac{2}{9}\pi + \cos \frac{4}{9}\pi + \cos \frac{8}{9}\pi + \cos \frac{10}{9}\pi + \cos \frac{14}{9}\pi + \cos \frac{16}{9}\pi$  の値を求めよ.

1975

(1)  $2^{\frac{2}{3}} = 2\sqrt[3]{2} < 3$  より,  $\log_2 3 > \frac{3}{2}$  …… ①となる. また,  $3^{\frac{2}{3}} = 3\sqrt[3]{3} > 4$  より,  $\log_3 4 < \frac{3}{2}$  …… ②

となる.

①, ② より,  $\log_3 4 < \log_2 3$ .

(証明終了)

(2)  $\cos 5\theta = \cos 4\theta$  を満たす  $\theta$  を考える.  $-1 < \cos \theta < 1$  の範囲において,  $0 < \theta < \pi$  である. $5\theta = \pm 4\theta + 2n\pi$  より,  $\theta = \frac{2}{9}n\pi$ ,  $2n\pi$  であり,  $\cos 5\theta = 16\cos^5 \theta - 20\cos^3 \theta + 5\cos \theta$ ,  $\cos 4\theta = 8\cos^4 \theta - 8\cos^2 \theta + 1$  から,

$$16\cos^5 \theta - 20\cos^3 \theta + 5\cos \theta = 8\cos^4 \theta - 8\cos^2 \theta + 1$$

$$16\cos^5 \theta - 8\cos^4 \theta - 20\cos^3 \theta + 8\cos^2 \theta + 5\cos \theta - 1 = 0$$

$$(\cos \theta - 1)(16\cos^4 \theta + 8\cos^3 \theta - 12\cos^2 \theta - 4\cos \theta + 1) = 0$$

ここで, 解と係数の関係より,

$$\cos \frac{2}{9}\pi + \cos \frac{4}{9}\pi + \cos \frac{6}{9}\pi + \cos \frac{8}{9}\pi = -\frac{1}{2}$$

$$\cos \frac{2}{9}\pi + \cos \frac{4}{9}\pi + \cos \frac{8}{9}\pi = 0$$

が成り立ち, また,

$$\begin{aligned} & \cos \frac{2}{9}\pi + \cos \frac{4}{9}\pi + \cos \frac{8}{9}\pi + \cos \frac{10}{9}\pi + \cos \frac{14}{9}\pi + \cos \frac{16}{9}\pi \\ &= 2\left(\cos \frac{2}{9}\pi + \cos \frac{4}{9}\pi + \cos \frac{8}{9}\pi\right) \\ &= 0 \end{aligned}$$

$$\text{(答)} \quad \underline{\underline{\cos \frac{2}{9}\pi + \cos \frac{4}{9}\pi + \cos \frac{8}{9}\pi + \cos \frac{10}{9}\pi + \cos \frac{14}{9}\pi + \cos \frac{16}{9}\pi = 0}}$$

2

次の (1), (2) を解答せよ.

(1) 1 から 10 までの 10 個の整数から相異なる 5 個をとり, その積を  $a$ , 残りの 5 個の積を  $b$  とする.  $a \neq b$  を証明せよ.(2) また, 1 から 10 までの 10 個の整数のうちの相異なる 5 個の積として表される整数のうちに,  $\sqrt{10!}$  より小さいものの個数を  $p$ ,  $\sqrt{10!}$  より大きいものの個数を  $q$  とする.  $p = q$  を証明せよ.

1975

(1) 1~10 までの 10 個の整数のうち, 7 の倍数を含むものは 7 のみだから,  $a$  または  $b$  のどちらか一方は 7 の倍数となるが, もう一方は 7 の倍数とはならないため,  $a \neq b$  となる.(2) 1~10 までの 10 個の整数から 5 個を選び, その積を  $c$ , 残りの 5 個の積を  $d$  とする. ここで, 対称性から  $c < d$  としても一般性を失わない. このとき,  $c \cdot d = 10!$  である.ここで,  $c < d$  から,  $c^2 < 10! < d^2$  となる. よって,  $c < \sqrt{10!} < d$  と表すことができるため,  $c$  は  $\sqrt{10!}$  よりも小さく,  $d$  は  $\sqrt{10!}$  よりも大きいことがわかる.ここで,  $c$  の個数と  $d$  の個数は一致するため,  $p = q$  となる.

(証明終了)

3

**a** 1つのさいころを  $n$  回つづけて投げ、投げた順に出た目の数の積をつくっていくものとする。このとき、次の (1), (2) を解答せよ。

(1) 目の数の積が  $k$  回目 ( $1 \leq k \leq n$ ) にはじめて 4 となる確率  $p$  を求めよ。

(2) 目の数の積が  $n$  回目までのどこかで 4 となる確率を求めよ。

**b**  $f(x)$  を  $0 \leq x \leq 1$  で連続な増加関数とする。  $0 < a < 1$  であるどんな  $a$  に対しても

$$\int_0^a f(x) dx \leq a \int_0^1 f(x) dx$$

が成り立つことを証明せよ。ここで  $f(x)$  が増加関数であるとは、  $x_1 < x_2$  ならばつねに  $f(x_1) \leq f(x_2)$  が成立することをいう。

1975

**a**

(1) 出た目の積が  $k$  回目までに 4 になるには、

[1]  $k-1$  回目までにすべて 1 を出し、  $k$  回目に 4 を出す

[2]  $k-1$  回目までに 1 回だけ 2 を出し、  $k$  回目に 2 を出す

のいずれかであればよい。

[1] のとき、  $\left(\frac{1}{6}\right)^k$

[2] のとき、  $(k-1)\left(\frac{1}{6}\right)^{k-1} \times \frac{1}{6} = (k-1)\left(\frac{1}{6}\right)^k$

(2)

$$\begin{aligned} S_n &= \frac{1}{6} + 2\left(\frac{1}{6}\right)^2 + \cdots + n\left(\frac{1}{6}\right)^n \\ \frac{1}{6} S_n &= \left(\frac{1}{6}\right)^2 + \cdots + (n-1)\left(\frac{1}{6}\right)^n + n\left(\frac{1}{6}\right)^{n+1} \\ \frac{5}{6} S_n &= \frac{1}{6} + \left(\frac{1}{6}\right)^2 + \cdots + \left(\frac{1}{6}\right)^n - n\left(\frac{1}{6}\right)^{n+1} \\ \frac{5}{6} S_n &= \frac{1}{5} \left\{ 1 - \left(\frac{1}{6}\right)^n \right\} - n\left(\frac{1}{6}\right)^{n+1} \\ S_n &= \frac{6}{25} - \frac{6}{25} \left(\frac{1}{6}\right)^n - \frac{n}{5} \left(\frac{1}{6}\right)^n \\ &= \frac{6}{25} - \frac{1}{5} \left(\frac{1}{6}\right)^n \left\{ \frac{6}{5} + n \right\} \end{aligned}$$

(答)  $\underline{\underline{\frac{6}{25} - \frac{1}{5} \left(\frac{1}{6}\right)^n \left\{ \frac{6}{5} + n \right\}}}$

**b**

$f(x)$  が単調増加関数であるから、  $\int_a^1 f(x) dx$  と  $\int_0^a f(x) dx$  の面積は、  $\int_a^1 f(x) dx \geq (1-a)f(a)$  の関係にある。すなわち、  $\int_0^a f(x) dx \leq af(a)$  より、  $f(a) \leq \frac{1}{1-a} \int_a^1 f(x) dx$  が成り立つ。

$\frac{1}{a} \int_0^a f(x) dx \leq f(a)$  より、  $f(a) \leq \frac{1}{1-a} \int_a^1 f(x) dx$  が成立。

$$\frac{1}{a} \int_0^a f(x) dx \leq f(a) \text{ より,}$$

$$\begin{aligned} \frac{1}{a} \int_0^a f(x) dx &\leq \frac{1}{1-a} \int_a^1 f(x) dx \\ (1-a) \int_0^a f(x) dx &\leq a \int_a^1 f(x) dx \\ \int_0^a f(x) dx &\leq a \int_a^1 f(x) dx + a \int_0^a f(x) dx \\ \int_0^a f(x) dx &\leq a \int_0^1 f(x) dx \end{aligned}$$

□

1

$x^3$  の係数が 1 であるような 3 次関数  $f(x)$  のうちで、定積分  $I = \int_{-1}^1 \{f(x)\}^2 dx$  を最小にするものを決定し、そのときの  $I$  の値を求めよ.

1976

$f(x) = x^3 + ax^2 + bx + c$  とする. このとき,  $I$  を計算すると,

$$\begin{aligned}
 I &= \int_{-1}^1 \{f(x)\}^2 dx \\
 &= \int_{-1}^1 \{x^6 + 2ax^5 + (a^2 + 2b)x^4 + (2ab + 2c)x^3 + (2ac + b^2)x^2 + 2bcx + c^2\} dx \\
 &= \int_{-1}^1 \{x^6 + (a^2 + 2b)x^4 + (2ac + b^2)x^2 + c^2\} dx \\
 &= 2 \int_0^1 \{x^6 + (a^2 + 2b)x^4 + (2ac + b^2)x^2 + c^2\} dx \\
 &= 2 \left[ \frac{1}{7}x^7 + \frac{1}{5}(a^2 + 2b)x^5 + \frac{1}{3}(2bc + b^2)x^3 + c^2x \right]_0^1 \\
 &= 2 \left\{ \frac{1}{7} + \frac{1}{5}(a^2 + 2b) + \frac{1}{3}(2bc + b^2) + c^2 \right\}
 \end{aligned}$$

である.

$g(b) = \frac{1}{3}b^2 + \frac{2}{5}b$  とする. このとき,  $g'(b) = \frac{2}{3}b + \frac{2}{5}$  であり,  $g(b)$  は  $b = -\frac{3}{5}$  のとき最小値をとる.

$$\begin{aligned}
 h(a, c) &= \frac{1}{5}a^2 + \frac{2}{3}ac + c^2 \\
 &= \left(c + \frac{1}{3}a\right)^2 + \frac{4}{45}a^2 \geq 0
 \end{aligned}$$

であるから,  $(a, c) = (0, 0)$  のとき, 最小値 0 をとる.

$I$  を最小にする  $f(x) = x^3 - \frac{2}{5}x$  であり, そのときの  $I$  は  $I = 2\left(\frac{1}{7} - \frac{3}{25}\right) = \frac{8}{175}$

(答)  $\underline{\underline{I = \frac{8}{175}}}$

1

5 次以下のどんな整式  $f(x)$  に対しても

$$\int_{-1}^1 f(x) dx = af(0) + b\{f(c) + f(-c)\}$$

が成り立つように  $f(x)$  に無関係な定数  $a, b, c$  を定めよ.

1978

$f(x) = dx^5 + ex^4 + fx^3 + gx^2 + hx + i$  とする.

$$\begin{aligned} & \int_{-1}^1 (dx^5 + ex^4 + fx^3 + gx^2 + hx + i) dx \\ &= \int_{-1}^1 (ex^4 + gx^3 + i) dx \\ &= 2 \int_0^1 (ex^4 + gx^3 + i) dx \\ &= 2 \left[ \frac{1}{5} ex^5 + \frac{1}{3} gx^3 + ix \right]_0^1 \\ &= \frac{2}{5} e + \frac{2}{3} g + 2i \end{aligned}$$

また,  $af(0) = ai$ ,  $b\{f(c) + f(-c)\} = 2b(ec^4 + gc^2 + i)$  である.

$$2 \text{ 式の係数をそれぞれ比較して, } \begin{cases} 2bc^4 &= \frac{2}{5} \\ 2bc^2 &= \frac{2}{3} \\ (a+2b) &= 2 \end{cases}$$

これをそれぞれ解いて,

$$(\text{答}) \quad (a, b, c) = \left( \frac{8}{9}, \frac{5}{9}, \pm \sqrt{\frac{3}{5}} \right) \quad (\text{符号任意})$$

2

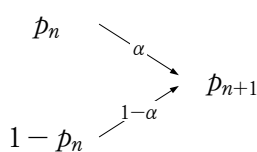
A, B 2 人が次のような規則でさいころを投げるものとする. さいころを投げて 1 の目が出れば次回も同じ人が続けて投げ, 1 以外の目が出れば次回は他方が投げることにする. 第 1 回目は A が投げる.  $n$  回目に A が投げる確率を  $p_n$  とするとき, 次の (1), (2) を解答せよ.

(1)  $p_{n+1}$  を  $p_n$  の式で表せ.

(2)  $\lim_{n \rightarrow \infty} p_n$  を求めよ.

1978

(1)  $n$  回目に A が投げる確率が  $p_n$  であるため,  $n$  回目 B が投げる確率は  $(1 - p_n)$  と表される.



同じ人が続けて投げる確率を  $\alpha$  とすると,  $\alpha = \frac{1}{6}$  である. 推移図より,

$$p_{n+1} = \frac{1}{6} + \frac{5}{6}(1 - p_n) = -\frac{2}{3}p_n + \frac{5}{6} \text{ である.}$$

$$(\text{答}) \quad p_{n+1} = -\frac{2}{3}p_n + \frac{5}{6}$$

(2)

$$\begin{aligned} p_{n+1} - \frac{1}{2} &= -\frac{2}{3} \left( p_n - \frac{1}{2} \right) \\ p_n - \frac{1}{2} &= \frac{1}{2} \left( -\frac{2}{3} \right)^{n-1} \\ p_n &= \frac{1}{2} \left( -\frac{2}{3} \right)^{n-1} + \frac{1}{2} \end{aligned}$$

$$(\text{答}) \quad \lim_{n \rightarrow \infty} p_n = \frac{1}{2}$$

3

$p, q$  は区間  $a \leq x \leq b$  ( $0 < a < b$ ) で  $px + q \geq \log x$  を満たすものとする. このとき, 定積分

$$I = \int_a^b (px + q - \log x) dx$$

が最小となるような  $p$  および  $q$  を求めよ. また, そのときの  $I$  の値を求めよ.

1978

解答

$I$  が最小値となるのは,  $y = px + q$  が  $y = \log x$  と  $x = t$  ( $a < t < b$ ) で接するときであるので,

$$\begin{aligned} px + q &= \frac{1}{t}(x - t) + \log t \\ &= \frac{1}{t}x + \log t - 1 \\ \therefore p &= \frac{1}{t}, \quad q = \log t - 1 \end{aligned}$$

このとき,

$$\begin{aligned} I &= \int_a^b \left( \frac{1}{t}x + \log t - 1 - \log x \right) dx \\ &= \left[ \frac{1}{2t}x^2 + (\log t - 1)x - x \log x + x \right]_a^b \\ &= \left\{ \frac{1}{2t}b^2 + (\log t - 1)b - b \log b + b \right\} - \left\{ \frac{1}{2t}a^2 + (\log t - 1)a - a \log a + a \right\} \\ &= \frac{1}{2t}(b^2 - a^2) + \log t(b - a) - b \log b + a \log a \end{aligned}$$

ここで,  $I$  が最小となる  $t$  は,

$$\begin{aligned} \frac{dI}{dt} &= -\frac{1}{2t^2}(b^2 - a^2) + \frac{1}{t}(b - a) \\ &= -\frac{1}{2t^2} \{ (b^2 - a^2) - 2t(b - a) \} \\ &= -\frac{1}{2t^2}(b - a)(b + a - 2t) \end{aligned}$$

であるから,

$$\begin{aligned} t < \frac{a+b}{2} \text{ のとき } & \quad \frac{dI}{dt} < 0 \\ t > \frac{a+b}{2} \text{ のとき } & \quad \frac{dI}{dt} > 0 \end{aligned}$$

より,  $t = \frac{a+b}{2}$  のとき,  $I$  は最小となる. したがって,  $p = \frac{2}{a+b}$ ,  $q = \log\left(\frac{a+b}{2}\right) + 1$

$$\text{(答)} \quad \underline{\underline{I = (a+b)(b^2 - a^2) + (b-a) \log\left(\frac{a+b}{2}\right) - b \log b + a \log a}}$$

1

数列  $x_1, x_2, \dots, x_n, \dots$  が  $x_{n+1} = 2x_n + \frac{1}{2^n}$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) を満たすとき、数  $a$  を適当に定めれば、すべての  $n = 1, 2, \dots$  に対して不等式  $|x_n - 2^n \cdot a| \leq \frac{1}{3}$  が成り立つことを証明せよ。

1979

解答

$$x_{n+1} + \frac{1}{3 \cdot 2^n} = 2 \left( x_n + \frac{1}{3 \cdot 2^{n-1}} \right)$$

$$x_n + \frac{1}{3 \cdot 2^{n-1}} = \left( x_1 + \frac{1}{3} \right) 2^{n-1}$$

ここで、 $x_1 = b$  とすると、 $x_n = \left( b + \frac{1}{3} \right) 2^{n-1} - \frac{1}{3 \cdot 2^{n-1}}$  である。

また、 $a = \frac{1}{2} \left( b + \frac{1}{3} \right)$  とすると、

$$\begin{aligned} |x_n - 2^n \cdot a| &= \left| \left( b + \frac{1}{3} \right) 2^{n-1} - \frac{1}{3 \cdot 2^{n-1}} - \left( b + \frac{1}{3} \right) 2^{n-1} \right| \\ &= \left| -\frac{1}{3 \cdot 2^{n-1}} \right| \leq \frac{1}{3} \end{aligned}$$

したがって、すべての  $n = 1, 2, \dots$  に対して、不等式

$$|x_n - 2^n \cdot a| \leq \frac{1}{3}$$

が成立することが示された。

□